



つなぐ

TSUNAGU
2010

四句節を
よりよく
過ごすために

A HOPE FOR SALVATION
ESPERANÇA PARA A SALVAÇÃO
ESPERANDO LA SALVACIÓN

救いへの希望

目 次

はじめに 信仰の希望に満たされて生きる カリタスジャパン責任司教 菊地 功	2
この冊子の使い方	4
英語、スペイン語訳のご案内	5
四旬節第1主日に 相談者と一緒に「希望」探す 自殺防止のNPO活動7年	6
四旬節第2主日に 国籍越えともに生きる教会へ 移住移動者を支え働く司祭は願う	11
四旬節第3主日に イエスとともに重荷を担って 司祭も苦しむ、人間として	16
四旬節第4主日に 愛ある「突き放し」で光を見る 薬物依存の息子との苦闘10年	21
四旬節第5主日に 誰もが安心できる居場所づくり 「かぼちゃの国」の支え合い生活	26
受難の主日に 遺族の霊的な痛みに伴 召命を感じて葬儀屋10年余	31
Segundo Domingo da Quaresma POR UMA IGREJA VIVA ULTRAPASSANDO FRONTEIRAS PEDIR SACERDOTES QUE TRABALHAM COM IMIGRANTES E REFUGIADOS	36
あとがき 隣人への回心 カリタスジャパン担当司教 幸田和生	42
注記ならびにその他情報	43
お知らせ 社会系各委員会発行物のご案内	44
2010年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧	46

信仰の希望に満たされて生きる

カリタスジャパン責任司教 菊地 功

私たちは、「希望」を抱いて生きていますでしょうか。一昨年から続く、「百年に一度」などとまで形容される経済危機^{ただなか}の直中で、私たちは生きています。回復の兆しを見出すことが困難で、私たちの周囲には希望を生み出すことのない現実^{あみか}が溢れています。「希望」はどこにあるのでしょうか。

このような社会の現実を目の前にして、教皇ベネディクト十六世は、回勅『希望による救い』において、「希望を持つ人は、生き方が変わります。新しいのちのたまものを与えられるからです」と述べ、私たちの信仰こそが希望であると力強く宣言しています。それでは私たちは、その「希望」をどこに見出すことができるのでしょうか。

四旬節にあたり日本の教会は、祈りを深め愛の業への意識を高めるために、四旬節小冊子をカリタスジャパンを通じて毎年発行してきました。社会の中であって弱い立場に追いやられた人々、苦しみと困難の真っ直中にある人々の心からの「叫び」に耳を傾けることから始まった四旬節小冊子は、「叫び」からの「ひびき」を聴くことへと受け継がれました。そして一昨年から、「ひびき」を「つなぐ」ことを目指して歩みをさらに進めています。今年^{ことし}の四旬節小冊子「つなぐ」を編集するにあたり、編集委員会は「救いへの希望」をテーマとして選びました。現代社会のさまざまな困難に直面する中で希望を見出す道を探り、それによって信仰の本質に迫りたいと考えたのです。

取り上げた現実の中には、「自死」や「薬物依存」という現代社会に深刻な影響を及ぼしている課題があります。また障がいを持っている人たちや滞日外国人の現実にもスポットを当てました。さらに今年^{ことし}は、教皇が昨年6月に開始を宣言された「司祭年」にもあたっていることから、司祭の姿にも目を向けようと考えました。

私たちの国の現実には、厳しいものがあります。例えば昨年10月に厚生労働省が初めて公表した「貧困率」があります。それによれば、私たちの国において1998年以降、相対的貧困率が悪化の一途をたどっており、そのことが国内における経済的格差の拡大を意味しているといえます。「貧困」や「格差」の問題は、はるかどこか見知らぬ国の問題なのではなく、私たち自身が直面する現実であることを、貧困率の数字が具体的に示しています。生活における安心感の欠如や、先行きのはっきりとしない社会の現実、あたかも私たちから人生における希望を奪い取ろうと仕向けているかのようです。

教皇は昨年の世界平和の日のメッセージで、「大多数の人々が住んでいる（貧困と格差という）そのような状況は、彼らの尊厳に対する侮辱であり、またその結果として、世界共同体の真の調和的な進歩・発展に対する脅威となっている」と指摘されました。「貧困と格差」は、まさしく人間の尊厳そのものに対する侮辱なのです。教皇は、「人間が作り出すあらゆる極度の貧困の根源にあるのが、人間の人格の超越的な尊厳に対する尊重の欠如である」と述べています。すなわち「極度の貧困」は自然に発生したものではなく、人間が生み出したものなのです。貧困を生じさせ、その「残忍な力」を野放しにしているのは、私たち自身であるということにほかなりません。

四旬節は、祈りと節制と愛の業を通じて、信仰を問い直す「時」です。私たちは不安に満ちている社会の現実に対して、信仰に基づいた希望を伝えているのでしょうか。私たちが伝え、またその生き方を通じて証しする福音は、希望の福音です。その「福音は、あることを伝達して、知らせるだけではありません。福音は、あることを引き起こし、生活を変えるような伝達行為」（回勅『希望による救い』）です。信仰における希望に満たされて、まず自分の身近な現実から福音の力によって変化を生み出しましょう。希望の福音の力によって、すべての人間の尊厳が回復されるように、この四旬節とともに祈りましょう。

この冊子の使い方

- ・この冊子は、四旬節の間、自分たちの生活や現代の社会を見つめ直し、悔い改め、主の復活をふさわしく迎える準備のためのものです。主キリストの復活とともに、私たちがより神のみ心になかった生き方へと変えられていくことを目指しています。
- ・四旬節の間、1週間に1つずつ、主日の福音に合わせて読みます。四旬節第1主日に第1の話を、第2主日に第2の話をという具合です。受難の主日に、第6の話を読みます。
- ・それをさらに深めたい方のために、「ふりかえり」のページがあります。これはグループでも、個人でも使うことができます。
 - 1) まずは、体験談を読んで心に響くところを味わいます。グループの場合は、感想を分かち合うとよいでしょう。
 - 2) 次に、自分の生活と社会を見直します。ヒントを参考にして、ふりかえってみましょう。グループの場合は、それをまた分かち合うとよいでしょう。
 - 3) そして、もう一度、主日の福音を読みます。体験談と結びつけたヒントがあるので、主日のミサの時と違う響きがあるかもしれません。グループの場合、少し沈黙して黙想する時間を入れてもよいでしょう。
 - 4) 最後は共同祈願で締めくくります。もし特別に気になっている人がいるならば、その人のために心を込めて祈りをささげましょう。グループの場合、簡単な祈りで終わってもよいし、ロザリオの祈りや十字架の道行と組み合わせてもよいでしょう。

英語、スペイン語訳のご案内

The English translation of this year's second article, "The Church Coexisting With People Of Various Nationalities" can be downloaded from our homepage.

La traducción al español del segundo artículo de este año "Una Iglesia que supera las barreras nacionales y vive unida - Este es el deseo de un sacerdote que trabaja con emigrantes" puede bajarse de la página web.

昨年の英語訳に引続き、今年第2話「国境越えともに生きる教会へー移住労働者を支え働く司祭は願う」をポルトガル語に翻訳して掲載しました。

英語、スペイン語も翻訳しましたが、小冊子に掲載するのは紙面の都合で難しいため、ホームページからダウンロードできるようにしました。英語圏、スペイン語圏のお知り合いにご案内ください。

URL 英語 http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2010_en.pdf
スペイン語 http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2010_es.pdf

Publicamos a tradução em português de "POR UMA IGREJA VIVA ULTRAPASSANDO FRONTEIRAS - PEDIR SACERDOTES QUE TRABALHAM COM IMIGRANTES E REFUGIADOS". Este ano é o segundo episódio, continuando o que iniciamos no ano passado.

Similar to last year's edition, this edition also includes a foreign language translation. This year, the Portuguese translation is printed while the English translation can be downloaded from our homepage.

URL English: http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2010_en.pdf
Spanish: http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2010_es.pdf

Desde el año pasado publicamos nuestro mensaje en otros idiomas. Este año vamos a hacerlo en portugués. La traducción en español puede bajarse de la página web.

URL URL http://www.caritas.jp/contributi/pdf/shijun2010_es.pdf

相談者と一緒に「希望」探す

自殺防止のNPO活動7年

「事業不振から自殺に追い込まれる経営者のいのちを一人でも多く救いたい」と語るのは、東北地方で自殺防止に取り組むNPO法人の理事長Aさん（65歳）。警察庁の資料によると、2008年の全国の自殺者は3万2249人で11年連続して3万人を超えた。30歳代が過去最多となるなど若い世代の自殺が増えた年だったが、年代別では依然50歳代、特に男性が5000人を超し長年にわたって最も多い。健康、家庭問題など様々な自殺動機の中で、自ら築き上げた事業が行き詰まった末に、というケースがこの世代で特徴的だという。

幼時からの人生経験が活動の原点

Aさんは「こうやって自殺防止の活動をしていますが、生まれてからいろいろ自分の身に起こったことすべてが、今のこの活動につながっているように思います。私は、そういう運命に生まれてきたんでしょうね」と人生を振り返る。東北生まれのAさんは、6歳の時に父親を亡くした。父親は地元で事業を営んでいたが、ある日、山に入っていったきり帰って来なかった。「それは事故だったのか、ひょっとしたら自殺だったのかも知れない」と今でも思い悩む。突然母子家庭になってAさんの生活は一変した。母親は家族のために夜遅くまで働いた。子どもたちは、父親がいないということで周りの冷たい視線を感じることも多かった。Aさんは残された家族をそういう状況に追いやった父親に恨みを覚えるようになった。また、子ども心に「自分は将来事業で成功して、父を超える存在になるんだ」という決意を固めたと言う。

学校を出てできるだけ早く働き母親を助けたいと、仕事を探したが、

母子家庭ということで断られ、差別を感じたこともあった。ようやく、県の福祉事務所で相談員の仕事に就くことができました。「自分も厳しい生活をしていたので、相談に来る人のことがよく分かりました。この時の経験が今の活動にも生かされています」という。その後民間企業で数年働き、1978年、34歳で独立して不動産関連の事業を始めた。事業は順調に拡大を続けて、一時期は50人を超える従業員を抱えるまでになった。子どもの頃の決意が実現し、社会でもひとかどの経営者と言われるところまで登り詰めた達成感があった。「このまま一生楽に暮らしていけるだろう」。

事業に失敗、知人たちも相次ぎいのちを絶って

しかし、順調と思われた事業も、市場環境の変化に対応できず雲行きが怪しくなる。何とか立て直そうと努力したが2000年9月に倒産。同じ時期に、地元の知り合いの経営者3人が、事業不振を苦に自殺した。みな経営者として責任感が強く、まじめに頑張っていた人たちだった。この時Aさんは自らもいのちを絶ちたいという誘惑に襲われた。しかし、「ここで逃げてはいけない、自分には責任がある」とAさんは残務整理に奔走した。関係先との折衝、弁護士との打ち合わせ、従業員の再就職先探しなど、その年の大みそかまで過酷な日々が続いた。年が明け緊張の糸が切れて、脱力感からAさんはうつ状態に陥ってしまった。「疲れていたんでしょね。事後処理が終わった途端、次の日から全くやる事が無くなって、『自分はなんで生きているんだろう』と絶望感に襲われました。幻覚が現れ、生きるエネルギーが90パーセント飛んでしまった感じです。水の無いダムのような状態になってしまったんです」。

翌年5月、Aさんの耳に友人の社長が自殺したというニュースが飛び込んできた。この友人も従業員を何十人も抱える会社を経営し、互いに励まし合いながら事業を拡大させてきた仲だった。この時、言いようのない怒りがこみ上げてきた。「コツコツと努力してきた友人がなぜ死ななければならないのか。事業に行き詰まったからといって、死を選ばざるを得ない社会はおかしい」。Aさんは、「こんな状況を何とかしてほし

い」と県庁に乗り込んで談判した。しかし、自殺は個人の問題という意識が支配的で、「行政では動けない」との返事だった。ただ、行政側から市民団体の取り組みの支援は惜しまないとの反応があったので、「このまま生きていても、特にこれをやりたいということも無いんだから、自分でやってみよう」と決心し、2002年、自殺防止に取り組む現在のNPO法人を設立した。

430社もの経営者から悩みの相談

設立から7年間で、約430社の経営者から悩みの相談が寄せられ、面談回数は約2000回にのぼる。この1、2年は他県からの相談が増えている。東京から車で何時間もかけて来る人もいる。Aさんは、「事業の悩みはなかなか地元では周りの人に話せないんですよね。自分も事業をしていたので、そういった人の気持ちがよく分かります」と話す。相談に来る人の約20パーセントはうつ病の症状があるそうで、実際何らかの治療を受けている。それほどでなくても、ほぼ全員が「眠れない」などの精神的な苦痛を抱えている。相談は1回2時間程度、長い時は5時間にも及ぶことがある。また、活動は相談対応^{しんちよく}だけでは終わらない。問題解決に向けて相談者と打ち合わせしたことの進捗確認や関係機関との調整も大変だ。「体力勝負ですね。歳をとるとなかなか無理も利かない」と苦笑する。

Aさんは、相談の中で徹底して相手の話を聞くことを心がけている。「心の痛みを抱えて相談に来ているから、いきなり解決は不可能です。自分は聞き役に回り、相手は話をする中で解決の糸口に少しずつ気づいていく。1年くらいかけて徐々に解決していくつもりで取り組むことが必要な時もあります」。また、寄り添いながら、気配りと優しさが必要とも言う。「自分がバリバリ仕事をやっていた時はそんなこと気づきもしなかったですよ。経営のスジ論を振りかざしただけでは解決しない。今はそれが分かるんです」。Aさんは自分の役割を、「相談に来た人に、自分には少しでも希望があるんだということを伝えること」と表現する。「人はどんな時でも生きたいと思っているんです。だけど、苦難に

直面すると、ふと『死にたい』という気持ちが出てくる。でもそれはいつまでも続かないのも事実です。だから、死にたいと思っている間、『あなたにはまだこんな希望がありますよ』と伝えて、一緒に問題解決の道を探って支えていくことが大切。自分もそうでしたが、心が落ち込んでくると、普段は見えていることも見えなくなって、そこにまだ希望があることさえ分からなくなってしまいます。残された希望がわずか1パーセントであっても、それを伝え、一緒になってその希望に向かって努力を始めると、相手の顔色がだんだん良くなって生きる力が回復してくるんです」。

ネットワークで自殺防止へ連携を

長年の活動の中で、「この活動をやってよかった」「自分も救われた」と思うことは多い。「うつ状態で目を離せない状態だった人が、何回かの相談の後『お陰でいのち拾いました』とあいさつに来た時は、逆に自分がその人から力をもらうのを感じましたね」。半面、つらい思いをしたこともあった。相談に来て一緒に解決策を考えながら何回も面談していた人が、突然亡くなったことがあった。「自分は一生懸命やっていたつもりだったのに、忙しくなって、きめ細かな対応がついおろそかになっていたのではないか」と無力感を覚えた。2008年9月以降の世界同時不況の影響で、日本国内でも、事業に行き詰まり助けを求めている経営者は確実に増えている。この1年間、AさんのNPOを相談に訪れた人の数は急増している。「自分のところのような、たった3人でやっている小さなNPOがどんなに頑張っても限界があります。同じような活動をする団体が日本の各地に広まってほしいですね。そして、それらがネットワークとして連携できるようになったら、大きな力になると思います」。Aさんの自殺防止に向けた取り組みはこれからも続く。「これは私の運命ですね」という言葉とともに。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・この記事を読んだあと、何が心に響いただろうか。それを静かにふりかえてみよう。

2) 生活と社会を見つめ直す

- ・自分自身が抱える問題に押しつぶされそうになったことがあるだろうか。絶望感に襲われたり、場合によっては、自殺まで考えたことも。
- ・そのとき、どのようにして踏ん張れたのだろうか。記事では、希望が一つのキーワード（重要な言葉）になっているが、自分に当てはまる可能性があるだろうか。あるいは他に何が支えになっただろうか。例えば、まわりの人の支え、神への信仰など。
- ・現代社会で人々が自殺に追い込まれてしまう競争社会の^{あつれき}軋轢や孤独の現実がある。それに対して、NPOなどの貴重な貢献もあるが、私たち一人ひとりにも何かできることがないだろうか。

3) 主日の福音を黙想する

「イエスは、荒れ野の中を『霊』によって引き回され、40日間、悪魔から誘惑を受けられた」（ルカ 4・1-2）。

- ・荒れ野でのイエスの姿を思い浮かべてみよう。荒れ野は現代の殺伐とした社会を象徴しているかもしれない。その中で、イエスが悪魔の誘惑を受けているように、私たち現代人もさまざまな誘惑を受けている。富や名声への誘惑もあれば、自殺や絶望への誘惑もある。イエスは何によって、悪魔の声に打ち勝つことができたのだろう。そのイエスの態度を見つめてみよう。

4) 人々のために祈る

- ・現在、自殺まで考えているような、大きな苦しみにある人々に心を向けてみよう。彼らが絶望から希望を見だし、一歩でも未来に向けて歩み出せるように心を合わせて祈ろう。
- ・もし自分自身が大きな困難をかかえているのならば、イエスを信頼して、希望のうちに歩める力を願おう。

国籍越えとともに生きる教会へ

移住移動者を支え働く司祭は願う

日本で働く外国人労働者たちを取り巻く環境は厳しい。世界不況の影響も彼らの生活を直撃した。仕事や子どもの教育など多くの困難な問題を抱えている彼らにとって、ミサや教会という共同体は生きる希望を見つけ、人生の喜びを感じる場となっているのだろうか。ブラジル人司祭のオルメス師は外国人労働者の霊的ケアについて長年現場を見てきた。

国・家族と離れ孤独に生きる人々

オルメス師が所属するスカラブリーニ宣教会は、1887年に移住者の司牧を目的にイタリアで創設された。「日系ブラジル人が多く働いている日本で、彼らのサポートが必要であるという会の方針により、東京教区への赴任が決まりました」。2003年来日して以来、カトリック東京国際センター（CTIC）を拠点に、ブラジル人をはじめ、スペイン語圏、英語圏の人々の司牧に従事している。その活動は千葉、埼玉、群馬、茨城、栃木など関東一円に及ぶ。

外国人労働者は来日の際、^{あつせんじん} 斡旋人によって勤務地を振り分けられ、見知らぬ土地にたった一人で赴くこともしばしばある。「6年前茨城のある町を訪ねたときの事です。ローカル線の改札口で一人のブラジル人から声をかけられました。彼は電車から降りてくる外国人がいれば知り合いでなくとも母国語で話をしたくて、数少ない電車が到着するのを1日中待ち続けていたのです」。

「祖国、家族と離れて暮らすということは、孤独なことです。生活の苦しさだけでなく、親しみのある環境を失い、日常なじんだミサや教会の行事といったものからも切り離され、自分のより所となる場を失い、

精神的に厳しい状況に置かれます」。こうした喪失感は実際に祖国を離れてみて初めて気づく場合が多い。カトリック圏からの移住移動者にとって、母国では教会はどの町でもすぐ目につく建物だが、日本ではそうではないということに、彼らは最初戸惑う。また仕事が始まると日曜が必ずしも休日ではないので、ミサにあずかることも困難になり、仮に参加できたとしても自国の言葉でのミサは月に一度だけ、ということに物足りなさを感じる。

「またあるとき、都内でジョギングをしていたときのことです。黄色いブラジルのサッカーチームのTシャツを着て走っていた私を見つけ、一人の若者が『ブラジル人ですね!』と声をかけてきました。彼は数週間前に日本に来たばかりで、家族や恋人と離れてさびしい気持ちを誰かに語りたかったのです。私たちはコーヒーを飲みながら2時間も話をしました」。日常の何気ないことについて母国語で話したい、という彼らと同じ思いのブラジル人は多いのだろう。

移住移動者や船員たちのために働く

オルメス師は1974年にブラジルで司祭に叙階、カナダ内陸部のエドモントンで移住者の司牧に当たった。「当時カナダでは、チリからの亡命者が毎週数百人単位で移送されてきました。彼らの多くは教育を受けた人々ですが、独裁政権による国外追放という形で到着するのです。チリ国内では政治犯として投獄され、家族と引き離され、肉体的・精神的に大きな傷を負っていました」。祖国を追われ、孤独の中に生きる人たちをオルメス師は支えた。

その後米国シカゴのロヨラ大学で勉強し、さらにメキシコや中米からの移住移動労働者の霊的ケアに携わり、85年からは船舶での司牧を15年間務めた。「船での仕事は、二通りあります。物資を輸送する船の乗組員たちは、多様な国籍から成っており、宗教も、カトリック、プロテスタント、仏教、イスラムと様々です。彼らは長期間家族と離れ、労働条件も厳しい。ミサを挙げるのでよかったら一緒に、と声をかけると、喜んで参加する人たちもいました。場所は、使用されない時間帯のダイニ

ングルームだったり、停泊地の教会を使ったりしました。一方、観光客には司牧の内容も異なります。ミサは大規模で船内の劇場を使用するなど、いろいろな経験をしました」。カナダ、アメリカ、船舶上などでの体験によって、師は世界の移住移動者の孤独や苦しみの実情を知った。

教会を互いの苦悩を分かち合う場に

人が親しみを感じる共同体の代表格は家族、地域または教会など宗教上のつながりとしての場であろう。日本に滞在する外国人にとってそれらの場が十分に機能しなくなった場合、孤独などから生じる精神的な病の問題も深刻になっていく。立ち直す支えのためにも教会に来て、ミサに出て、日常の苦しみを分かち合えるコミュニティづくりが必要だ。しかし、日本の教会では、外国人と日本人の融合はまだ十分とは言えず、互いにどう接すればよいか模索している。外国人に親切ではあるが、お客さまのような特別扱いで、距離を感じる。

オルメス師は、そこに文化の違いがあると指摘するが、この日本人と外国人の違いを受け入れ、「同じ信仰を持つもの同士が自由に交流し、お互いを知り、教会を少しずつ親しくなる場となるよう変えていきたい」と語る。「受け入れる、と一言でいっても簡単なことではありません。でも、それは新しい関係をつくるための産みの苦しみとして自然なことだし、時間がかかって当然のことだと思います」。経験から言えることは、「ミサがパターン化されて単なる儀式になってしまうなら、それだけで、親しい関係になるのはむずかしい。確かにミサは一連の流れに沿って執り行われる儀式ですが、そこは人々の人生そのものの祝いがあり、祈りがあり、心からの声を上げる場となって欲しい。そして、人々の交流の機会として、ミサの後に食事をしたり語り合ったり、時にはダンスや音楽などを共有する時間と場所があれば、足りない部分を補う可能性があるでしょう」。

その可能性に希望と確信を感じたのは、2008年のブラジル移民100周年を記念する各地での行事だった。神戸では、催し物で披露するブラジル伝統の歌や踊りの練習を重ねるうちに、ブラジル人、日本人が互いに

親しい関係になっていく過程を実際に体験できた。「日本人と外国人が苦楽をともにして一つの教会を形づくっていく、そこに自分の役割があると感じています」とオルメス師は語る。

受刑者たちの再出発を後押しする役割も

現在、オルメス師のもう一つの顔は教誨師^{きょうかいし}である。刑務所に出向き、服役中の人々が新しい人生に自信を持って再出発できるよう面会を通して支えるという役割である。

「彼らは確かに罪を犯しました。貧困、失業など苦しい生活の中で不安な日々が続き、生き延びるために悪の行為に走ってしまった、という背景があったかもしれません。しかし罪を認め反省したあと、ずっとそれを引きずらないで、新しい生活に向かう心を持ってほしい。そのため彼らと話します。罪を犯したことによって多くの苦しみ、悲しみがあり、社会や家族が受け入れてくれるか不安も大きいけれども、時間をかけて話すうちに彼らの表情がひととき和らぐことがあります。その変化が私にとっては喜びになります。苦しみの中をともに歩み、心と心の対話によって彼らが前向きに生きようという気持ちになって、笑みが浮かんだ時、その変化は神様の喜びでもあると感じるのです」。

「経済危機も大きな影響がありました。多くの困難の中で、私たちはお互いを思いやり、励まし合い、自分たちの価値観を再発見できたことは、危機の中での実りだと言えます。それは私たちの強さ、希望の源は神への信頼にあるという価値観です」。

さまざまな理由で祖国を離れ、生きている人々がいる。困難を抱える外国人移住者を信仰の面から支える司祭たちの存在は大きい。また同時にそこに集う人々が国籍に関係なく、温かさと親しみを感じるコミュニティとしての教会をともに築いていくために、私たち一人ひとりも大きな役割を担っている。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・この記事を読んで、何を感じただろうか。何に興味を覚えたのだろうか。それを静かに味わってみよう。

2) 生活と社会を見つめ直す

- ・移住労働者は地球規模で増大しているが、精神的にも生活面でも支援が充分ではない現実がある。社会の隅に追いやられる人々に心を向けてみよう。彼らの存在が問いかけていることはないだろうか。
- ・教会の中でも、外国籍の信徒が急増している地域がある。この人たちとともに歩める教会に変わっていくため、どんな心構えが必要だろうか。
- ・自分自身が社会の片隅に追いやられる孤独を体験した人があるかもしれない。それをどう受けとめ、乗り越えていけばよいだろうか。

3) 主日の福音を黙想する

「『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた」(ルカ9・35)。

- ・イエスが受難に向かう前、弟子たちを力づけるために、神的に変容した姿を現された。それは弟子たちが未来に向かって希望を失わないためだった。現代社会にあっても、現実の苦しみに打ちひしがれるだけでなく、未来の理想に向かって歩んでいかなければならない。イエスの変容の姿と、その声を聞きながら、私たちがどこに向かうべきか、今、何をすべきか、問いかけてみよう。

4) 人々のために祈る

- ・社会の中で苦しんでいる人々のために献身的に奉仕している司祭も多くいる。「司祭年」にあたり、心を込めて祈ろう。司祭の奉仕が神の恵みで強められ、さらなる実りをもたらすように。さらに、私たちも協力していくことができるように。
- ・移住労働者をはじめ、現代社会では十分に支援を得ることができない弱い立場に置かれた人々が多い。この人たちに实际的な援助の手が差しのべられるように、心を込めて互いに祈ろう。

イエスとともに重荷を担って

司祭も苦しむ、人間として

聖ヨハネ・マリア・ビアンネの帰天から150年を記念する「司祭年」は6月19日まで続く。「牧者の模範」と敬愛されるこの聖人の生涯を思いめぐらしながら、司祭のために祈っている人も多いだろう。司祭は悩みや苦しみをどんな時に感じ、どう受けとめているのか。日ごろ触れる機会が少ない司祭の本音が聞ければと、ある司祭館を訪ねた。白髪まじり、初老の司祭から、今までのご自分の苦しみを率直に語っていただいた。印象的な部分を紹介したい。

思わぬ誤解を受けた母娘への援護

「まだ若いころの話です。その時、出会った親子がいました。母と娘さんで、ご主人ともめごとが多く、離婚騒動や生活苦などを背負っておられました。その親子を助けるために、私はいろいろと心を尽くしていました。母親の情緒が不安定で、しばしば子どもを虐待するので、司祭館に子どもを引き取っていたこともあります。プライバシーを守るため、他の信者に事情を詳しくは説明できませんでした。私としては、何とかその親子を救いたいという一念だけでした。ある日、司教から呼び出されて驚くような注意を受けました。私とその母親と不適切な関係になっていると、教会中のうわさになっているというのです。それまで信者さんから私に一言も注意がなかったのに、突然、司教に呼び出されたのです。自分の善意が周りの人に全く理解されていなかったことにショックを受けました。その後、訴えた信者が誰だか分からず、疑心暗鬼の日々が続きました」。

やはり司祭の最大の苦しむは信徒との確執なのだろう。信徒の心ない

態度だけでなく、信徒同士のトラブルに巻き込まれたり、信徒と決定的に対立したりすることもある。

「その時は、司教が私の話を信じてくれたので大きな問題にはなりませんでしたが。ところがその後、その司教とこじれてしまいました。付属の幼稚園の園長をやっている、自分なりに自信をもって働いていた時です。ベテランの主任の先生との教育方針の違いから大きく対立してしまいました。私にも頑固なところがあったのでしょうか。その先生が司教に訴えたのです。司教はその先生と共感するところがあったのか、全面的に先生を応援することになってしまいました。ついに私は園長を実質的に解任され、その小教区から去ることになりました。司教に^{まも}護られないと、司祭はみじめなものです。意見の対立があるのは仕方ないことかもしれませんが。意見の対立よりも苦しかったのは、自分は司教に全く評価されていない人間だということを思い知らされたことです。人間性そのものを全否定されたように感じました」。

第三者として話を聞く限り、その先生に非があったのか、司祭に非があったのか、あるいは司教に非があったのか、何ともはっきりしない思いが残った。教会内で決定的な分裂が起これば、和解することは難しい。責任ある立場の者が痛みを伴う決断をも下さねばならない。それによって、司祭が犠牲になることもある。そのような犠牲をどのように受け入れたのだろうか。

苦しみをイエスの受難と重ねて

「イエス・キリストの姿です。若いころは、貧しい人に奉仕するイエスの優しさに親しみを感じ、さらにファリサイ派と戦って正義を実現するイエスに従いたいと願っていました。しかし、自分自身が周りの人の無理解や排斥に直面して、イエスの苦しみにもっと近くあざかったように思いました。イエスは受難の時、無実でありながら、人々から侮辱され、あざけられました。それを淡々と受けとめている十字架上のイエスがともにいてくださるような感じました。その時、人の評価や評判にこだわっている自分の愚かさ気づかされ、自分は司祭だとか、園長だと

かいう^{ごうまん}傲慢な心が砕かれました。司祭職とは、謙虚な心で、イエス・キリストとともに苦しみを担っていくことなんだと悟られました。それから、出会う人々の苦しみをもっと素直な心で受けとめられるようになったと思います」。司祭はもう一人のキリストであるとも言う。深いしわが刻まれた横顔にイエスの面影が一瞬重なったように見えた。

内面的な苦しみに触れた中で、印象深いのが孤独と無力感の話だった。「すべての司祭に当てはまらないでしょうが、私の場合、日曜日の夜に辛さを感じることがあります。週末はいつも忙しいものですが、日曜日の夕方には皆が帰宅し、教会はしんと静まります。疲れ切って独りで夕食を食べていると、ひしひしと孤独感が迫ってきます。みんな家族と一緒にご飯を食べているだろうなと思うと、無性に寂しくなることがあります。年をとってくると、子どもや孫がいない現実に向き合わねばなりません。そういう時に限って、自分のしてきた仕事に何の実りもなかったように思え、無力感に打ちひしがれます。心の病気を抱えた青年にかかわりながら、彼が突然自殺したこと。善意のつもりでかけた言葉によってかえって傷つけてしまい、二度と教会に現れなくなったあの人のこと。福音宣教に打ち込んできましたが、結局、これという成果が見られないこと。そのような過去の挫折が押し寄せてきて、自分が司祭として老いて死んでいくと、すべてが消えてしまう恐怖感が湧いてくるのです」。

こう推測する。司祭にかかわる問題の根に、多少ともこの孤独感や無力感が絡んでいるのではないかと。司祭の中には自分の悩みを率直に相談する場がないため、孤立に拍車がかかってしまう人もいる。それが突然、司祭職を放棄してしまったり、セクハラなどのスキャンダルを起こしたり、燃え尽きてしまったりなどの結果を生む。事が起こった時は、取り返しがつかない惨状になってしまうこともあると。

主の恵みに信頼し、その道具として

「司祭の苦しみに対して、特効薬のような解決方法があるわけではありません。結局のところ、自分に弱さや貧しさがあることを素直に認

め、神の前にひれ伏し、明日もまた、苦しんでいる人々に無償の愛を注いでいけるよう願うだけです。逆説的ですが、日曜日の夜の祈りが神に一番近い時かもしれません。孤独であろうと、無力であろうと、互いに愛し合っていく掟を与えられているのですから」。司祭は自ら苦しみを背負いつつ、多くの人々の苦しみに直面する。もちろん、人の苦しみを魔法のように解決できるわけでない。司祭の役割は、ただイエス・キリストを信じつつ、ともに解決方法を模索しながら、少しずつ救いの光が差し込んでくるのを希望していくことだと強調された。

「救いは自分の力で作り出すことはできません。神の恵みなんです。その恵みをしみじみと感じる時、心が慰められます。先日、ある独身の女性が突然訪ねてきて、自分の苦しみを吐露したことがありました。彼女は日頃から信仰もあつく人柄もよい人で、将来が楽しみな人でした。その彼女が妊娠中絶手術を受けた。ゆるしの秘跡を別の司祭から授かり、償いを果たしたが、どうしても苦しみから解放されないとはいえず。そこで、私は生まれてこなかった赤ちゃんのためにミサをささげようと提案しました。他の信者が誰も来ない時間帯にごく親しい友人とともに、追悼ミサをささげました。その後、彼女が泣きながら、子どもが天国に行くのが感じられた、これで私も救われましたと言いました。彼女のほっとした姿を見た時、叙階の秘跡を受けて本当によかったと思いました。自分の努力が全く報われないように思えることも多いですが、他方で、まごころを込めて一回限りのミサを立てることで救われる人もいます。司祭は神の恵みを伝える単なる道具にしか過ぎないんですね。だから、自分の祈りも活動も、喜びも苦しきもすべてを神のみ手に委ねていくしかないのです」。

正直な話に心から感謝しつつ、司祭館を後にした。私たちは神父様に理想的な人間を期待しがちだが、普通の男性と変わらない苦しみをもっている方もおられることもよく分かった。ただその苦しみを通して、キリストとともに苦しみ、ともに歩もうとする信仰心にも少し触れることができた。このキリストに目を注ぐ時、私たちもまた前に一歩進んでいけるかもしれない。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・この司祭の打ち明け話を読んで、何を感じただろうか。それを味わう。

2) 生活と社会を見つめ直す

- ・この司祭の態度や考え方のうち、何に共感しただろうか。何に反発を覚えただろうか。
- ・自分自身の苦しみを見つめてみよう。自分はそれをどのように受けとっているだろうか。それを信仰の観点からどのように見つめているだろうか。
- ・教会の中で信徒と司祭は必ず顔を合わせる。信徒と司祭の真の協力関係はどのようなものだろうか。

3) 主日の福音を黙想する

「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」(ルカ13・5)。

- ・人生において出会う苦しみや困難、罪や失敗は誰にでもつきものである。そこからさらに学び、素直に回心し、新たな態度で歩いていけるかどうかである。この福音を通して、改めて自分の生き方を問い直してみよう。

4) 人々のために祈る

- ・司祭年に合わせて、イエスとともに重荷を担っている司祭のために祈ろう。真の司祭職を全うしていけるようにと。
- ・教会の中では司祭と信徒との関係がうまくいっていないこともある。互いが尊重し合い、建設的な協力関係を築いていけるよう、教会全体のために祈ろう。

愛ある「突き放し」で光を見る

薬物依存の息子との苦闘10年

親がひたすら愛情を注げば、子どもは悪い道にはそれない。万一それでも子どもを受け入れることで必ず更生できる、と多くの人は思っているのではあるまいか。新潟県の小西憲さん（61歳）、美代子さん（56歳）夫妻に話を伺った。夫妻は、薬物依存の息子洋太さん（31歳）と家族を救うために苦闘の末、愛の極みとして「突き放す」ことを選び、ようやく光の中を歩み始めている。

夫妻が異変に気づいたのは10年前、洋太さんが実家を離れて1年、東京の専門学校に通っているときだった。洋太さんと連絡がとりにくくなり、保証人である憲さん宛に、家賃や電話代の請求書が直接届くようになったことからだ。様子を見るためアパートに行く中にも入らせてくれない。最終的には電気やガスも止められ、自宅に連れ帰った。病院通いを始めたが、その間も昼夜逆転の生活が続き、症状は好転しないまま。そのときはまだ薬物を使用していたことは知らなかった。

夫妻が「薬物依存症」と主治医に告げられたのは精神医療センターに回されてからであったが、そのときはすでに新潟に帰って1年が過ぎていた。それでも2、3カ月も入院すれば治る病気と簡単に考えていたのだ。しかしこれが終点であると思っていた苦しみは、実は始まったばかりであるということを夫妻はだんだんと悟っていくことになる。薬物に手を出したのは、子どもときからの統合失調症による生きづらさが原因であったと、今では理解しているが、それは薬物依存者回復施設の一つである「ダルク」〈注1:43ページ〉につながってからのことである。

薬漬け、入院と退院を繰り返す

受け入れることこそが子どもの病気を治せる最強の力と信じていた夫妻は、病院から外泊許可が出ると一緒に外食し、CDなど欲しがるとは買い与え、その上、消費者金融（サラ金）の返済を肩代わりし、薬欲しさに薬局で万引きまでする息子のために頭を下げてお金を払い、警察沙汰にしないでと頼み、子どもに良かれと思う方法で一心に愛情を注いだ。

憲さんは仕事で家庭を顧みなかったという罪悪感、美代子さんには共働きで自分の母親に育児を任せっぱなしだったという後ろめたさがある一方で、これからゆっくり子どもとかかわれるという喜びもあったのだ。とにかく薬物をやめさせれば病気は治ると簡単に考えていた夫妻だが、洋太さんは薬物を断ち切ることができなかった。入院した病院でも隠れて覚せい剤を注射し、退院してからは通院の帰りに薬局でもらう処方薬依存になり、足りないとかぜ薬、せき止め、鎮痛剤、睡眠導入剤など市販薬を次々手に入れる。お金を渡さなければ万引きをする。薬を飲んで意識不明に陥ったり、何回も病院を抜け出して帰ってきたり、規則を守らず強制退院になったりで、精神科のはしごを繰り返す。鍵のかかった病室で両手、両足など全身を拘束され、看護師詰め所の監視カメラで管理されている息子の姿を見て泣いたこともある。薬物依存の怖さを、これでもかこれでもかと思せつけられる日々に夫妻は疲れ果て、わらをもつかむ思いで、インターネットで見つけたのがダルクであった。

茨城ダルクとの出会い

渋谷で行われたダルクの集いを紹介された夫妻は、そこで感動的な姿を目の当たりにする。大勢の観衆の前で太鼓をたたく若者たちと、それを涙ながらに見る女性の姿であった。それは、薬物依存のわが子のため何年も苦しみながら、ダルクによってここまで回復したわが子の姿を、うれし涙で見る母親だったのだ。その姿に憲さんは「ダルクってすごいところだ」と感じる。それがきっかけで、茨城ダルクとその家族会を知り、訪ねて行くことになる。

代表の^{いらいきよひろ}岩井喜代仁氏は自分も覚せい剤を常用していたが、これを断ち切っただけでなく、覚せい剤・薬物依存者回復と社会復帰のため、茨城ダルクを設立した人である。岩井氏に出会ったとき、憲さんは手の施しようのない息子の姿を思いながら、同様の薬物依存者をここまで回復させているこの人にわが子を託したいと思った。そのときの岩井氏の言葉は痛烈であった。「あなたは自分の子をどうしたいのですか、一生精神病院に入れたいのですか。一生刑務所に入れたいのですか。死体置き場ですか。それともダルクですか」と。夫妻は「ダルクへ」としか答えようがなかった。支援を受けて、ようやく薬をやめる決心をした洋太さんであったが、実のところは親の敷いたレールに乗せられただけであった。その後も、薬を大量に飲んで意識不明になったこともあり、数カ所のダルクを出たり入ったりしたのである。

世間体という殻が破れ、新しい生き方へ

「『家に帰る』と言ってダルクを出た」という連絡を受け、最寄りの駅に会いに行ったことがある。家に入れてしまったらおしまい、どんなことがあっても家に入れてはいけない、「突き放しなさい」。それがダルクの教えであった。「家に戻りたい」「家には入れません。同じことの繰り返しだから」「家に入れて欲しい。入れてくれないのなら川に飛び込む」「あなたの生命ですから、どうぞ自由に…」」。心の中では、一晩だけでも家に泊めたい、このまま放り出して絶望のあまり本当に自ら生命を絶つたらどうしようと、心配が駆け巡るが後戻りはできない。以前の、受け入れる姿勢の愛情を掛けるだけでは、このようになってしまった息子を救うことはできないことに気づいていた。「このような形で拒絶することは、子どもよりも親の方が耐え難いことだったかもしれません。でも、決断できたのはダルクへの信頼があったからです」と夫妻。結局、洋太さんを家には近づけさせなかったのである。

その後も洋太さんは路上生活をしたり、警察に捕まったり、自殺未遂をしたり、更生には程遠い生活が続く。あるときは「本人のしたことから、本人に責任を取らせてください」と、たった1枚のCDを万引

きしたわが子を、かばうことなく警察官に引き渡したこともある。薬を飲もうと必死な息子と、やめさせようとする親との真剣勝負であった。

しかしある日、自宅の前で「家に帰りたい」「入れない」と警察官を挟んで押し問答をしていたとき、ひた隠しにしていた息子の薬物依存症が近所に知れ渡ってしまった。夫妻が最も恐れていた事態である。しかし現実には、知れ渡ったことで一家が新しい生き方へと方向転換できたのである。世間体を大切にすゝ殻から抜け出すことができたのだ。近所を一軒一軒訪ねては息子の病気を理解してもらい、ダルクの存在も知らせ、堂々と我が家から別の数家族と共にダルク家族会へ出かけることもできるようになった。

かたときも洋太さんのことが頭から離れない夫妻にとって、ダルクの家族会から学んだことは多い。その中でも夫妻にとって最も大きな考え方の転換は、自分たちの力の限界を素直に認められるようになったことだ。ダルクの回復プログラムにあるハイヤーパワー（より高い存在。カトリック信者ではないが、憲さんはそれを神様と表現する）に任せる以外にない、との境地にたどり着いたことだ。

どん底でのよい出会いが人間関係を変えた

洋太さんはいくつかのダルクを渡り歩いた末、ダルクから離れて生活保護をもらいながら東京で一人暮らしをしている。自立して生きることを教えるダルクの方針に従ってのことだ。

「私は洋太を通して子どもとの関係を見直すことができました。その結果、夫婦の関係、兄弟との関係も変わってきました。相手と考えが違って、『そういう考え方もあるだろう』と今は認めることができます。また子どもに何かあっても、これは誰が解決する問題なのだろう、親なのか、子ども自身なのか、と考えるのです。私たちにとって最も幸せだったことは、どん底状態でよい出会いができたということです。人は出会う人によって、回復に向かうか死に向かうか分かれると思うのです。私はこのときの出会いで苦しみを感謝に変えることができたのです」と話す美代子さん。そして「今はこの苦しみが与えられてよかった

と思っています。人はそれぞれ使命を帯びて生きているのだと思うのです。私たちは洋太の存在を通して学んだことを、薬物依存者を抱えて苦しむ多くの家族に伝え、苦しみを希望に変えていく使命が与えられているのでしょう」と、憲さんはすっきりした表情で話を締めくくった。

* ふりかえりのために *

1) 感想を味わう

- ・この壮絶な親子の話を読んで、何が心に響いただろうか。それを味わってみよう。

2) 生活と社会を見つめ直す

- ・家族の中でどのような問題を抱えているだろうか。それを解決していくため、真に愛することはどのような選択をすることだろうか。親子愛、兄弟愛、夫婦愛など、自分に何が問いかけているだろうか。

3) 主日の福音を黙想する

「まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」(ルカ15・20)。

- ・有名な放蕩息子ほうとうの話と、この記事の話を読み比べてみよう。一見すると、それぞれの父親は全く相反する態度をとっているように見えるかもしれない。しかしながら、両方の父親に共通するのは、子が真に立ち直るのを望んでいる無償の愛であろう。その姿から、父なる神がどうしようもない囚われとらや罪で苦しんでいる私たちをどのような思いで見つめ、助けようとしておられるかを思いめぐらしてみよう。

4) 人々のために祈る

- ・依存症や統合失調症など、心の闇をかかえる人のいやしは並大抵ではない。この人たちに真の救いが与えられるように、心を込めて祈ろう。
- ・現代では、多くの家族がさまざまな問題で苦悩している。家族が協力して、それを乗り越えていく力が与えられるように、祈っていこう。

誰もが安心できる居場所づくり

「かぼちゃの国」の支え合い生活

「アキラさん、どうしたの？ 姿が見えないけど」「仕事まだ済まないのかなあ。さっき事務所にいたよ」。40人ほどのにぎやかな昼食の席で、気遣う声飛び交う。「あ、来た来た」。安心したように食事が続く。大分県久住高原、標高700メートルにある「かぼちゃの国」。茅野明さん(49歳)は、ここの代表である。ひげもじゃ、人懐っこい笑顔でメンバーたちに慕われている。

悩みを抱える人は誰でも受け入れ

「かぼちゃの国」は、社会福祉法人「かぼちゃの国」とNPO法人「あんだんて」から成っている。「障害者自立支援法」(注2:43ページ)に基づき、身体的・知的・精神的なハンディを背負った人たちを援護する「かぼちゃの国」に対し、不登校や引きこもりなど困難な事情を抱えているのに、法の対象にならない人たちの社会参加を支援するのが「あんだんて」である。といっても、法の支援対象かどうか画然と分けるのは難しい場合もある。だから両法人は緊密に連携している。対人関係、進路の悩みなどを抱えて訪れた人には誰にでも、ほっとできる居場所を提供し、支え合って生きていく。このためには、二つの受け皿が欠かせないと茅野さんは言う。

「かぼちゃの国」では昼間総勢50人ほどが過ごす。ほとんどが自宅からの「通い」で、住み込んでいるのは茅野さん夫婦、メンバーの夫婦と独身者6人の計10人。ここでメンバーというのは支援対象者のことである。メンバーの最高齢は70歳の元大工さん、最年少は19歳で、20代が中心である。男女比は半々。この約40人のメンバーを10人のスタッフとボ

ランティアが支えている。

2009年5月に新築した作業所兼たまり場のほか、ビニールハウス、バイオ燃料工房、鶏・家畜小屋、古い農家だという茅野さんの自宅や男女別の寮などが山すその地に点在する。そこを拠点に農業、バイオ燃料精製、手仕事など、メンバーの特性に合わせて作業をしている。

農業チームは1.3ヘクタールの水田と50アールの畑を有機栽培で耕す。コメや野菜は内部で食材に使うほか、大分市のグリーンコープ生活協同組合とスーパーに出荷する。鶏を20羽ほど飼っていて、卵や肉用に活用するほか、山羊、ポニー、兎などが癒やしの役目を担っている。バイオ燃料は生協の協力で集めた廃食用油からつくる。所有するディーゼル車6台分を賄い、販売もする。クヌギを焼いた炭も出荷している。

手仕事のグループは牛乳パックを再利用してハガキやカレンダーを作る。共同の食事の用意に専念する調理班もある。ほかに、車で10分ほど離れたパン工房「久住高原ぱんころりん」でパンと菓子を作っている。

働くのは週日の午前9時から午後4時までで、昼食・休憩にゆっくり時間を割く。しかも日常の過ごし方は、基本的に個々の自由に任せているのだと言う。こうして、ほぼ自給自足の暮らしが成り立っている。

大自然に抱かれ、ともに生きる

茅野さん夫婦が久住に移り住んだのは1987年。いろいろな個性を持った人がともに生きていく場所をつくりたい——という早くからの望みを実現するための入植だった。3人の子育てをしながら田畑を買ったり借りたりして少しずつ増やす一方、青年団や消防団に入り、祭りの伝統芸能に参加するなどして地域の一員として認めてもらえるようになった。この間、問題を抱えた青年たちに農業体験を通じて元気になってもらおうという支援活動を始め、99年には小さな作業所「カントリーワークぱんぷきん」を設立した。軽作業や農業が主体で最初のメンバーは5人だった。

その後作業所は、2001年NPO法人の認可を受け、さらに03年「社会福祉法人かぼちゃの国」となって、小規模通所授産施設「カントリーワ

ークぱんぷきん」に衣替え、NPO法人は「あんだんて」と改称した。05年には「ぱんころりん」を開設して今日に至っている。

久住の大自然に抱かれて、ものづくりをする暮らし。一人ひとりを大切にするとともに生きる。自分の特色・個性に胸を張って生きる。こんな思いや理念が基本にある。そして自給自足する共同体・すてきな仕事場と居場所・安心と生きがいのある所、の実現が目標だ。とはいえ、いろんな人を受け入れて数が増えた結果、時にもめごともある。体の動きが思うに任せなかったり気持ちをうまく表現できなかったりすると、イライラが募って口げんかや小競り合いに発展する。男女関係のもつれで姿を消したメンバーもいる。特に言葉で訴えることが苦手なメンバーが出すサインに気づくことが大切だ。「なだらかにまとめて一つの方向に導くのは難しい。日々人間ドラマを見るようです」といいながらも、茅野さんは確かな手ごたえも感じている。

多くのお会いを通じて福祉の道へ

福岡に生まれた茅野さん自身が波乱に富んだ少・青年期を送っている。いい子の中に隠れていた反骨精神が中学半ばに目覚めて反抗期に。父の転勤で長崎市に住んでいた高校2年生の終わり、先生とのトラブルがもとで退学して家出。五島列島の牧場に住み込み、定時制高校に編入した。ここで出会った仲間たちは一見不良なのに、中身は温かくやさしい。人は見かけではなくて奥が深いと実感した。

卒業後、酪農を学びたいと北海道農業専門学校へ。全寮・2年制で、春から秋にかけて戸外で働き、冬場は授業という学校だった。茅野さんは興味が野菜に向かい、有機栽培を実践しているグループを訪ね歩いた。そして石狩山地に近い新得町の新得共働学舎しんとくに行き合い、農場で働くことになった。ここでは心身にハンディを持つなど生きづらい事情を抱えた人たちが共同生活をしながら、自分らしく生きることを目指している。

茅野さんは初めてハンディのある人たちと直接向き合う体験をしたが、「何かしてあげなければ」という意識で接してしまう自分に気づ

く。だが実際に付き合ってみて、人間はみな同じだという事実に目覚めていく。そして、福祉を本格的に勉強する必要を感じ、日本福祉大学に移った。在学中に働いた施設で、後に結婚する奈緒子^{なおこ}さんと出会い、意気投合。共働学舎に戻ることも考えたが、むしろ自分たちの理想を実践したいと各地で土地探しをした。結局、親戚が土地を貸してくれるという話に誘われて、登山でなじみがあった久住に入植したのだった。

福祉をサービス事業とする制度に違和感

この20年余、大勢の若者とかがわってきた。中学生のころやって来た少女は、極端な対人恐怖症だった。他人の顔を見ただけで吐き気を催し、隠れてしまう。がんばらせず自分のペースが保てるように計らい、自然と家畜相手の生活の中でゆっくりと変化を待った。やがて彼女はメンバーと交わることができるようになり、今ではパン工房のスタッフとして活躍するまでになった。その成長ぶりが茅野さんにはうれしい。

40歳のヤンキー風の男性は、施設を半年ぐらいでたらい回しにされた末に関東から来て3年間いたが、ささいな行き違いで暴力を振るうなど、メンバーが恐怖を訴えるほどになったので、最終的には出て行ってもらった。その後の消息は不明で、後悔と気懸かりをぬぐい去ることができない。後を絶たない新たな悩みとの二人三脚が続く。

06年の「障害者自立支援法」施行に伴い、「かぼちゃの国」も「ばんころりん」で行う就労移行支援事業〈注3:43ページ〉と「ばんぶきん」による就労継続支援事業〈注4:43ページ〉という二つの支援事業の主体と位置づけられている。給付金と負担金は1人当たりの単価で計算されるが、メンバー数が常に変動していて計算の基礎が一定しないのがつらい。何よりも福祉をサービス事業と位置づける制度自体に茅野さんは違和感を覚えている。

法律の制約や小さなトラブルを抱えながらも、茅野さんは働き続ける。農作業、パン工房の手伝い、事務、外部折衝などを曜日ごとに割り振っている。プライベートな休みは、他県で学生生活を送る子どもたちが帰宅したとき取る程度と言う。パン工房を中心に働く奈緒子さんは、

スタート前からの心強い同志。各地に約100人いる支援者の寄金にも支えられている。頑健なからだに感謝しながら、若者たちの笑顔に元氣ももらっている。

ふりかえりのために

1) 感想を味わう

- ・記事を読んだあと、何が心に響いただろうか。それを静かに味わってみよう。

2) 生活と社会を見つめ直す

- ・自分の生活の中で、「ほっとできる居場所」はどこだろうか。自分にそういう場所があるだろうか。
- ・現代の社会では、対人関係や進路の悩みなど多くの問題を抱えた人々が居場所を求めている。社会福祉のさらなる充実が求められるが、そのような居場所づくりに、私たちが貢献できることはないだろうか。

3) 主日の福音を黙想する

「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」(ヨハネ8・7)。

- ・現代社会では、弱い人や規格からはずれた人に、冷たく石を投げつけ、排除してしまう傾向がある。イエスは人を排除する原理を選ばず、ゆるしによって人が立ち直っていく道を用意している。罪を犯した女をゆるされるイエスの心遣いを感じてみよう。また、私たちがゆるしの心から、どのように人とかわかっていくように呼ばれているだろうか。どのような社会をつくっていくように呼ばれているだろうか。

4) 人々のために祈る

- ・居場所がなく孤独で虐げられているすべての人々のために祈りをささげよう。この人たちが自分らしく生きられる場を見だし、人々との温かいかわりの中で生きていけるように。
- ・まず、自分自身がゆるしの心でまわりの人をありのままに受け入れ、ともに支え合って生きていけるように、自分たちのためにも祈り合おう。

遺族の霊的な痛みに伴

召命を感じて葬儀屋10年余

すずきりゅう
鈴木隆さん60歳。少し白いものが混じるヒゲに覆われた風貌と穏やかな人柄から、周囲の人は「リュウさん」と呼ぶ。大学で社会学を講義するほか、祈りの同伴、カトリック月刊誌の編集などを通して宣教司牧活動に従事し、ある時はハンディを持つ人たちの支援に活躍している。そして、「ぜひあなたにしてほしい」と神から託されたという葬儀屋の仕事をして10年以上続けている。2008年、映画「おくりびと」が公開されると、隆さんも本物のおくりびととして講演に呼ばれる機会が増えた。話を聞いた多くの人が「安心しました」と口をそろえる。何が聴衆の気持ちをとらえるのだろうか。

いのちと引き換えに友を教会へ招く

多くの葬儀を見つめてきた隆さんにとって忘れられない思い出がある。17歳の青年のことだ。彼は聖木曜日に司祭とともに洗足式での祭壇奉仕をしたその日の深夜、友だちとバイクに乗っていて事故で天に召された。バイクの免許をその日に手にしたばかりだった。葬儀には多くの若者が参列し、その中には初めて教会に来た人たちが大勢いた。

「彼らは別れの寂しさに涙を流しながらも、友をご自分のもとで憩わせてくださる神様を感じたに違いない。復活の神秘に触れたかもしれない。涙する多くの若者の姿は、息子を失って悲しみに打ちひしがれていた親にとって慰めになったんです。息子が自らのいのちと引き換えに、たくさんの友を信仰と希望と愛によって神様とつながる教会へ導いたことを感じたでしょう」と隆さんは推し量る。

「だからこそ、亡くなった人がもたらした大いなる『ワンチャンス』

を生かし、司祭と信徒が一緒になって、故人の福音宣教の遺志をしっかりと受け止め、いのちをかけて招いたすべての参列者が復活への希望を抱ける場をつくりたいのです。司祭には心に染みとおる説教をお願いし、イエスの死が福音宣教の出発点だったように、一人の人の死を、永遠のいのち、神の愛に導かれる大きな恵みの時にしたい」。

死は怖いものというイメージ

死を考えるより、最後の時まで精いっぱい生きることこそ大切だと言う人もいるが、実際には悔いの多い人生を歩んできたからこそ、最後だけは人生に満足して死にたいと多くの人が願っている。だが死は思いがけず、突然来ることが多い。「いただいたいのちを神にお返しして、いのちの門をくぐる時は神が決めます」と隆さんは言う。

治療や延命を重視する現在の医療のあり方が、死を直視できにくいものにしたという意見があり、家庭ではなく病院で死を迎える人が増えたことがいのちの尊厳を考えにくいものにした原因の一つだという説もある。いずれにしても、死は「喪失」や「消滅」を想像させやすく、病気や事故と同じように、考えたくないものの一つだ。

「死を人々が恐れるのはそれだけではなく、穢^{けが}れたものに触れる恐れが混じっています。今のように衛生的な環境が整っていない時代には、遺体は死をもたらした病原菌やウイルスが潜んでいるかもしれないという意味で、汚^{よご}れた存在でした。清めの塩は衛生を保つための塩素消毒で、今も配られていますよね。死体に触れることは避けるべきという考えが、死の恐怖と混じり合ったのでしょう。遺体に触れる葬儀関係者とかかわらない方がよいという偏見を今も感じるがあります」。

こころの平和への道のり

どのような葬式をするのか、葬儀にはどのくらいのお金が必要なのかと心配する人もいるが、隆さんは、「高価で立派な棺を調べ、多くの人を呼んで葬儀をしても、その人が天国に行ける保証がある訳じゃありませんよね」と笑う。

そして「主イエスの隣で十字架につけられた犯罪人の一人は、おそらく洗礼者ヨハネからもイエスからも洗礼を受けていません。善い行いを積み重ねた訳でもない。それでも天国に招かれたのは、十字架上で『イエスよ、わたしを思い出してください』（ルカ23・42）と自分を神に委ねることができたからです」と話す。

愛する人を失うことは、すべての人にとって衝撃的で悲しいものだ。自らが支配できない死という場面に出合ったとき、ある者は「父よ、できますことなら、わたしからこの杯を遠ざけてください」（マタイ26・39=新改訳）と祈られた主イエスを思い出し、なぜ私が死ななければならないのかと絶望して「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」（マルコ15・34）というイエスの叫びを思い起こす。「しかし、わたしが願うことではなく、御心みこころにかな適うことが行われますように」（マルコ14・36）という受容を経て、旅立つ者と見送る人が「父よ、わたしの霊を御手みてにゆだねます」（ルカ23・46）という道のりの末に、心の平和をとり戻す。

遺族の立ち直りに欠かせぬ援助

カトリックの教会葬には、死を悼むだけでなく死は新たないのちへの門であり、そこに希望や願いが込められているという安心感がある。

花に囲まれた棺の前で、遺族と参列者が「みもたまも主にささげ、みこころにゆだねまつらなん」と聖歌を歌い、司祭は「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである」（ヨハネ6・39）と朗読して、復活への希望を説く。

葬儀は残された人々、生きている人々のためにも行われる。人にはそれぞれの顔があるように、その人だけの人生があり、一人ひとりの死が大切なメッセージを持っている。だからこそ一人ひとり違った葬儀になる。ところが、葬儀屋によっては、遺族の思いと関係なく、合理的に進めようとするあまり、標準化した葬儀の型にあてはめる場合がある。これでは、残された者の心の癒やしの過程が削り取られてしまう。

多くの遺族は、故人が生きているうちにその人にすべきことを十分にできなかったという心の負い目を抱えている。「遺族は時間をかけて悲しみをあふれ出させ、愛する人を神に委ねることで心に平安を取り戻し、未来に向かって歩き出す必要があります。教会の信徒は遺族の悲しみに寄り添い、司祭は心の痛みを受け止め励ます。その立ち直りの過程をゆっくりと優しく援助する存在が欠かせないのです」。

教会でも、自ら選んだ死や暴力など人為的な原因による死に接する機会が増えている。そうした悲しみに遭遇した遺族や近親者を支える必要性がますます高まっている。隆さんの話は、人の死を教会という共同体がどのように受け止めるかという問いかけのように聞こえる。

これは私があなたに頼んだ仕事

親友の叔父に当たる君健男きみたけお・元新潟県知事の葬儀は、葬儀屋を始めるきっかけになったことの一つだという。

神の計らいは不思議だ。病気を理由に県知事辞職願を議会に出し、それが承認された次の日に、神は君氏を天に召された。知事であったら無宗教の県民葬となっていたはずだったが、旅立つ日を神がたった1日延ばされたことで、葬儀はカトリックの典礼で行われ、信徒である君氏は多くの県民に、「私が信じた神に出会ってください、互いに愛し合ってください」というメッセージを残すことができた。この君氏の遺志は隆さんの中に生き続けた。

同じ教会の友人から葬儀屋の仕事を始めようと誘われた時、神が「恐れるな、思い煩うな、これは私があなたに頼んだ仕事だ」と声をかけてくださったように感じたと言う。

だから、「主はあなたに何を求めておられるか。それは、ただ公義を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩む」(ミカ書 6・8 = 新改訳)という言葉を大切に心に留め、常に葬儀の現場で心を尽くしたいという思いが強い。

ポケットの携帯電話が鳴る。隆さんは何をおいても必要とする人のもとへ駆けつける。たとえ深夜であろうと明け方であろうと…。

* ふりかえりのために *

1) 感想を味わう

- ・この記事を読んで何が心に響いたでしょうか。それを静かに味わってみよう。

2) 信仰と社会を見つめ直す

- ・自分自身、身近な人の死に接したことがあるだろうか。その時、どのような痛みや悔いを心に抱いたでしょうか。
- ・クリスチャンにとって死は終わりではなく、新たないのちの門である。その教えに希望やなぐさめが感じられるであろうか。
- ・私たちは誰かをおくらねばならないし、最期には、自分もおくられる立場になる。死を受け入れていく上で、何が大切なことだろうか。

3) 主日の福音を黙想する

「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ23・46)。

- ・今日は受難の主日で、イエスの死に向かう光景が朗読される。私たち自身がイエスの死に同伴する「おくりびと」の心境でイエスの受難を見つめてみよう。また、イエスの死を見つめることによって、私たちの死にどのような希望となぐさめを見いだすことができるだろうか。

4) 人々のために祈る

- ・死に直面しているすべての人(本人も家族も)のために祈ろう。彼らが現在の苦しみや不安を乗り越え、神にすべてをゆだね、安らかな心をもてるように。
- ・身近な人を亡くして悲しんでいる遺族の方々のために祈ろう、この人たちの心も安らぎに包まれるように。

POR UMA IGREJA VIVA ULTRAPASSANDO FRONTEIRAS

PEDIR SACERDOTES QUE TRABALHAM COM IMIGRANTES E REFUGIADOS

É exigente o ambiente que rodeia o trabalhador estrangeiro no Japão e com a influência da crise econômica mundial que atacou de frente a vida do trabalhador esta realidade veio agravar-se. Para esses trabalhadores que se preocupam com o trabalho, a educação dos filhos e inúmeros problemas, a comunidade eclesial, a missa se torna o lugar onde encontrar esperança e onde sentir a alegria da vida. Padre Olmes, sacerdote brasileiro, vem experimentando durante muitos anos a realidade sobre o cuidado da vida espiritual do trabalhador estrangeiro.

PESSOAS QUE VIVEM A SOLIDÃO DISTANTE DO PAÍS E DA FAMÍLIA

Padre Olmes pertence a Congregação dos Missionários de São Carlos (Escalabrinianos), fundada em 1887, na Itália e tem como objetivo a Pastoral do Migrante. Percebendo a necessidade clara do apoio para os muitos brasileiros de descendência japonesa trabalhando no Japão, a diocese de Tokyo confiou-lhe a tarefa de acompanhá-los. A partir de sua chegada ao Japão no ano 2003, ele tem sido ponto de apoio no Centro Católico Internacional de Tokyo (CTIC), tem dedicado a Pastoral dos Migrantes começando pelos brasileiros, os de língua espanhola, e os de língua Inglesa. Seu trabalho tem atingido toda a região de Kantô: Chiba, Saitama, Gunma, Ibaraki, Tochigi, etc

No momento de sua chegada, o trabalhador estrangeiro é distribuído aos diferentes lugares de trabalho, pelo intermediário das empresas e frequentemente, ele tem que ir sozinho por lugares desconhecido. “Há 6 anos atrás, visitando uma cidade de Ibaraki, na saída da

plataforma na estação, fui chamado por um brasileiro. Ele esperava que descesse do trem algum estrangeiro mesmo desconhecido para conversar na língua materna. Como naquele lugar, é escasso o movimento de trens durante o dia, ele estava ali por muitas horas.”

“A solidão de viver longe da pátria e da família psicologicamente é muito duro, pois o migrante é colocado numa terrível situação não só pelo sofrimento da vida diária, como também pela perda do ambiente familiar e do próprio lugar, separado das atividades da Igreja e da missa em que está acostumado.” Dessa maneira, frequentemente percebe-se a perda de sentimento daqueles que experimentam por primeira vez a separação da pátria. Os migrantes e refugiados que vem de regiões católicas, no início ficam desorientados pois, em qualquer cidade da terra natal, se vê logo o edifício da Igreja mas no Japão não é a mesma coisa. E quando começam a trabalhar não é sempre que a folga é aos domingos, por isso torna-se um sofrimento a não participação da missa dominical. Mesmo conseguindo uma participação esporádica, muitas vezes se sente insatisfeito porque a missa na própria língua acontece somente uma vez por mês.

“Outro dia, quando eu fazia (Cooper) caminhada pela capital de Tokyo, um jovem me viu usando a camisa amarela da seleção brasileira gritou: ‘É brasileiro, não é?’ Fazia algumas semanas que ele estava no Japão e longe da namorada, da família desejava conversar com alguém. Então, fomos tomar um café juntos e estivemos conversando durante duas horas.” Será que não há outros tantos com o mesmo sentimento desse jovem?”

O TRABALHO COM MARINHEIROS, MIGRANTES E REFUGIADOS

Padre Olmes foi ordenado sacerdote no Brasil em 1974, logo foi encarregado da Pastoral do Migrante em Edmonton, interior do Canadá. “Em Canadá, trabalhei com os exilados vindos do Chile que eram transportados em grandes grupos toda semana. Entre eles haviam muitos de boa educação, porém chegavam como expulsos do país pelo governo ditador. Carregavam profundas marcas psicológica, física

por terem sido separados da família e sido encarcerados como criminosos políticos no Chile.” Padre Olmes, animava essas pessoas que viviam a solidão, perseguidos pelo país.

Depois disso, padre Olmes estudou na Universidade de Loyola de Chicago – EUA, e aí novamente se ocupou do cuidado espiritual dos trabalhadores migrantes que vinham do México e de outros países da América Central.

A partir de 1985, esteve durante 15 anos trabalhando no serviço de embarcação marítima. “Um dos trabalhos nos navios é com os marinheiros, o segundo é a pastoral com os viajantes durante a viagem. A riqueza da tripulação do navio ultrapassa a riqueza material que transporta. É uma diversidade de nacionalidades e de religiões: Islamismo, Budismo, Protestantismo, Catolicismo, É muito duro para eles viver separados da família durante longo tempo e com as condições de trabalho difícil. Quando ia celebrar a missa, eu os convidava e muitos iam alegres para participar da celebração. Às vezes o lugar da Missa era na igreja do lugar onde o navio ancorava, ou no refeitório do próprio navio quando não estava sendo usado e para as celebrações em grande escala usávamos o teatro do navio. Neste contexto, o conteúdo da pastoral (homilias) era adaptado segundo o interesse dos turistas.” Através desta experiência em embarcação marítima feita no Canadá, Estados Unidos, padre Olmes conheceu de perto a solidão e o sofrimento do migrante e refugiado do mundo.

A IGREJA, COMO LUGAR DE PARTILHA

Possivelmente, quando as pessoas se sentem familiar na comunidade, este vínculo fica acima da família, bairro ou a Igreja, religião etc

Está agravando-se cada vez mais, as enfermidades psicológicas como consequência da solidão, entre os estrangeiros permanentes que não se saíram bem o suficiente na sua função no Japão. É emergente construir comunidades que dêem apoio psicológico, onde possam partilhar o sofrimento do dia-a-dia, porque essas pessoas procuram a Igre-

ja, participam da missa buscando reanimar-se e recuperar-se do sentimento de fracasso. No entanto, ainda não se pode dizer que é satisfatória a harmonia entre japoneses e estrangeiros na Igreja do Japão. Estamos ainda às palpadelas nos perguntando como devemos fazer para relacionarmos mutuamente. Embora sendo amável com o estrangeiro, sente-se a distância no tratamento especial, como a um “visitante”.

Embora apontando a diferença cultural, o Padre Olmes, comenta que percebe japoneses e brasileiros se aceitando mutuamente “quer ir mudando para que torne um lugar onde se familiarizam pouco a pouco, se conheçam e se entrosam livremente como companheiros da mesma fé.” “Falar em aceitação é fácil, mas na prática não é tão simples. É como a dor de parto e para construir uma nova relação tem que ser espontâneo, obviamente necessita-se tempo. A partir da experiência o que posso dizer é: Se a missa ficar reduzida somente a um padrão de um simples rito, é muito difícil construir uma relação de confiança. Certamente, a missa é um rito que pode realizar-se acompanhado de uma série de fatos. Nela as pessoas rezam, celebram a vida, e querem fazer dela um lugar de soltar a voz com sentimento. Além do mais é uma oportunidade de entrosamento das pessoas. Após a missa tem os comes e bebes, o bate-papo. Às vezes, dependendo do lugar e do tempo há também música, dança, etc. Durante estes momentos há possibilidade para suprir o que falta na missa.”

O Padre Olmes sentiu mais esperança e convicção para essa possibilidade, no ano de 2008 quando celebramos, em cada região, o centenário da migração japonesa ao Brasil. No evento de Kobe, experimentamos na prática, o processo de uma relação amigável entre brasileiros e japoneses durante os ensaios das danças e músicas tradicionais do Brasil. “Os estrangeiros e os japoneses vão construindo uma única Igreja partilhando as alegrias e as tristezas. Sinto que aí está nossa função.”

O TRABALHO COM OS ENCARCERADOS

Atualmente, mais uma face do ser de Pe. Olmes, é ser capelão do presídio. Ele sai propositalmente para visitar e animar as pessoas que estão na cadeia cumprindo pena e seu papel é ajudá-los e encorajá-los para recomeçar nova vida.

“Sem dúvida eles cometeram crimes. Quem sabe, viviam num cenário de pobreza, desemprego, dentro de uma vida de sofrimento com preocupação contínua, para melhorar a vida acabou se deslizando numa má ação. Apesar disso, depois do reconhecimento e o arrependimento do erro, o que mais desejam é não ficar a vida toda se arrastando e ter força para recomeçar uma nova vida. É para isso que converso com eles. Dependendo do crime que cometeram, carregam muito sofrimento, tristeza e também muita ansiedade por não saber se serão aceitos pela sociedade e a família ao deixar a prisão. Mas enquanto conversamos eles vão se acalmando e a expressão deles vai se transformando. Essa mudança é para mim uma grande alegria. Sinto também uma grande alegria por caminhar junto com o outro no sofrimento, e através do diálogo aberto, de coração a coração, eles renovam o sentimento para viver e encarar de frente a vida com um sorriso nos lábios.”

“A crise econômica influenciou-nos também em outro aspecto. Dentro dos inúmeros sofrimentos, redescobrimos os valores pessoais, pensamos mais uns nos outros, encorajamos mutuamente podemos dizer que isso é fruto da crise. A nossa força e a fonte da esperança, está na confiança em Deus.”

Por várias razões, as pessoas estão distante da terra natal. Necessitamos mais da existência de sacerdotes que animam a partir da fe os migrantes estrangeiros envolvidos no sofrimento. Ao mesmo tempo, também as pessoas que se reúnem tem o importante papel de construir juntos a Igreja através de uma comunidade onde sintamos familiaridade, acolhida cálida, ultrapassando as nacionalidades.

*** Para retomar a leitura ***

1) Saborear as impressões

O que eu senti ao ler este artigo?

O que me chamou a atenção?

Saborear tudo isso.

2) Rever a minha vida e a vida da sociedade

· A nível mundial se tende ao aumento de trabalhadores migrantes. Em muitos lugares não recebem apoio na vida cotidiana e nem no aspecto espiritual.

O que nos questiona a presença desses imigrantes?

· Na nossa Igreja, em algumas regiões, aumenta a presença de fiéis estrangeiros.

Que atitudes cultivar, para que a nossa Igreja seja mais fraterna na caminhada com os imigrantes?

· Podem existir pessoas que experimentam a solidão, sendo excluídas da sociedade.

Aceitamos passivamente essa realidade?

O que podemos fazer para superar a exclusão?

3) Meditar e orar o Evangelho do Domingo.

[Então da nuvem saiu uma voz: “Este é o Filho muito amado, ouvi-o!”] Lc 9 · 35

· Antes da Paixão, Jesus apareceu transfigurado diante dos discípulos, para animá-los e para que não viessem a perder a esperança ante o futuro. Na sociedade atual, porque estamos esmagados pelo sofrimento é necessário caminhar sustentados pelo sonho de Deus, a Utopia.

Contemplando Jesus transfigurado ouçamos a sua voz e perguntemo-nos-por onde caminhar e o que podemos fazer.

4) Rezar pelas pessoas.

· Rezemos pelos sacerdotes que se dedicam pelos que sofrem. Neste ano Sacerdotal, rezemos por eles para que sejam fortalecidos pela graça de Deus e que seus trabalhos produzam frutos. E procuremos colaborar com eles.

· Na nossa sociedade existem muitos trabalhadores imigrantes que não recebem suficiente apoio. Rezemos para que elas tenham o apoio concreto nas suas necessidades..

隣人への回心

カリタスジャパン担当司教 幸田和生

四旬節の大きなテーマは回心です。回心とは単なる「改心（悪い心を改めること）」ではなく、「心の方向転換」であり、全身全霊をもって神に立ち帰ることである、とよく言われています。

しかし私は、ある時、ある本の中で「隣人への回心」という言葉を見つけてハッとさせられました。この「隣人への回心」という言葉は、マタイ福音書25章40節の「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことだ」というキリストの言葉に基づいています。現代の私たちにとって、苦しみの中にあり助けを必要としている隣人に心を向けることが特別に大切な回心ではないかと言うのです。確かに、神とのつながりだけでなく、人と人とのきずなを見つめなおすことも、この四旬節の大切なテーマです。

伝統的な生活共同体が失われ、競争の原理が支配する産業社会の中では、人が神とのつながりも人とのつながりも見失い、どんどん「孤立」していき、行き詰ってしまう現実があります。自分の国を離れて生活している人、一般の事業所で働くのが難しい人、経済的に行き詰ってしまった人、依存症の人とその家族、愛する家族を失った人、それだけでなく、神と人のために働く司祭にも孤立の危険はあります。だからこそ「つなぐ」ということがこの四旬節小冊子のテーマなのです。

今年も多くの方の協力によって『つなぐ』を作成することができました。取材・執筆・編集にかかわってくださった匿名のボランティアの皆様には感謝いたします。そしてこの『つなぐ』を手に取り、読んでくださった皆様にも心から感謝しています。わたしたち皆が隣人に心に向け、人と人をつなぐために働くことができますように。

注記ならびにその他情報

愛ある「突き放し」で光を見る (21ページ)

〈注1〉ダルク (DARC) : ドラッグ (Drug=薬物)、アディクション (Addiction=病的依存)、リハビリテーション (Rehabilitation=回復)、センター (Center=施設) の頭文字を組み合わせた造語で、覚せい剤などの薬物依存からの回復、社会復帰を目指す民間施設。全国各地で活動する。

全国薬物依存症者家族連合会 (薬家連) <http://www.yakkaren.com/>

「誰もが安心できる居場所づくり」(26ページ)

〈注2〉障害者自立支援法: 身体的・知的・精神的の3障害に対する支援制度を一本化し、2006年4月施行。自己負担を求め、利用量に応じて原則1割を支払う「応益負担」に当初から関係者の反発も大きく、鳩山内閣は現行法の廃止と新たな仕組みづくりへ動き出している。

〈注3〉就労移行支援事業 障害者自立支援法に基づく支援事業の区分で、就労を希望する人に、必要な知識・能力を習得する訓練などをする機会を提供することが目的。

〈注4〉就労継続支援事業 支援対象者の中で通常の事業所での雇用が困難な人に働く機会を与え、種々の活動を通じて知識・能力の向上を図ることが目的。

社会福祉法人かぼちゃの国 <http://kabochanokuni.com/>

特定非営利活動法人 共働学舎 <http://www.kyodogakusya.or.jp/>

〈日本カトリック司教協議会の社会系委員会発行物のご案内〉

社会司教委員会

要望書「イスラエル軍によるガザ攻撃を即時中止して下さい」 発行 2009.1.9

社会司教委員会は、2008年12月27日に開始されたイスラエル軍によるパレスチナ自治区ガザに対する攻撃の中止と、真の和平に向かう対話によるプロセスの開始を求める文書を、イスラエル首相と駐日イスラエル特命全権大使あてに送った。

声明文「2009いのちを守るための緊急アピール」 発行 2009.1.13

2008年後半の世界的な金融危機による緊急事態に対し、「路上死」「自死」を出さないために、キリスト者として何ができるかを考え行動するよう日本のカトリック教会に向けてアピールを発表した。

すでに各地で行われている外国人労働者の支援と野宿を余儀なくされている人々への支援活動にできるかぎり多くの人々が参加するよう呼びかけた。

子どもと女性の権利擁護のためのデスク

「教会が子どもの権利を守るために 性的暴力への対応の手引き」 発行 2009.3.20

「子どもへの性的暴力への対応」として、性的虐待の意味、被害者支援、日本の法制度、教会・施設内の対応など基本的な知識をまとめたもの。

日本カトリック部落差別人権委員会

2009年世界人権デーにあたっての声明文「感染症にどう向き合うか」 発行 2009.12.10

世界人権デーにあたって、人権擁護の立場から、新型インフルエンザに関して危惧する点について声明を発表した。

日本カトリック正義と平和協議会

声明文 イスラエル軍によるガザ攻撃を即時中止してください 発行 2009.1.8

2008年、12月27日より開始されたパレスチナ自治区ガザに対する攻撃の即時中止を求めた。

声明文 ソマリア沖に海上自衛艦を出さないでください！海賊問題に名を借りた海外派兵新法に反対します！ 発行 2009.3.13

声明文 日朝両政府に対して、ロケット発射問題において憲法9条と「日朝平壤宣言」にもとづく関係回復への真摯な努力を求めます 発行 2009.4.2

声明文 7月28日の死刑執行に抗議します
大阪拘置所で山地悠紀夫さん、前上博さん、東京拘置所で陳徳通さん 発行 2009.7.30

講演録 「聖書から見た死刑廃止」 A5判58ページ 発行 2009年4.10

2008年7月11日、ニコラ・バレ（東京都千代田区）において日本カトリック正義と平和協議会「死刑廃止を求める部会」発足記念集会「死刑－どうして廃止すべきなのか－」が行

われた。ホセ・ヨンパルト師による基調講演の記録。

日本カトリック難民移住移動者委員会

講演録「世界の移民の現状と日本の課題」 A 5判51頁 発行 2009.3.31
橋本直子（国際移住機関 駐日事務所 プログラム・コーディネーター）

世界的な人の移動に対応する支援活動を実施し、移住と開発・移住の促進・移住の管理行政など移住の問題全般を専門的に取り扱う国際移住機関（IOM）駐日事務所 プログラム・コーディネーターの橋本直子氏による、世界の難民・移民の現状及び日本で生活する外国人の現状と課題を学ぶ講演録。

講演録「外国籍の子ども・女性たちと入管法改正 ～私たちの課題、教会としての課題～」 佐藤信行（RAIK所長／外キ協事務局） A 5判34頁 発行 2009.9.27

2009年7月、移住労働者の管理を徹底する「入管法」「住民基本台帳」などが改定された。改定案がどのような問題を持っているのかを知るために、「外登法問題と取り組む全国キリスト教連絡協議会」（外キ協）事務局の佐藤信行氏による講演録。

〈カリタスジャパン発行物のご案内〉

報告書「北海道洞爺湖サミット カリタスジャパンの対応報告」 2008年7月
A 4判46頁簡易製本 発行 2009.2.25

2008年7月に北海道洞爺湖において開催された「北海道洞爺湖サミット（G8サミット）」へのカリタスジャパンの対応をまとめた冊子。

世界エイズデー メッセージ・ポスター（ポケット付き） A 4判1枚
エイズ啓発ミニカード 発行 2009.12.1



カリタスジャパンHIV/AIDSデスクでは、昨年も12月1日の世界エイズデーに向けて、エイズの意識化のため呼びかけポスターを作成した。

2008年に作成したミニカードの活用促進のため、ポスターにカードを入れるポケットをつけ、直接手にすることができるようにした。

全国の教会、カトリック学校に配布。

「叫び 合本：1997～2002」（四旬節キャンペーン小冊子）
A 5判222頁 頒布価格400円（作成経費、郵送費込み） 発行 2003.1.12

前シリーズ『ひびき』の前のシリーズ『叫び』を創刊号から6年分まとめた。

『つなぐ2009』『つなぐ2008』、『ひびき』のバックナンバーご希望の方は事務局にお申し込みください。郵送いたします。

2010年度四旬節キャンペーン資料の問い合わせ先一覧

2010年度四旬節キャンペーン資料として例年のように、四旬節キャンペーン小冊子『つなぐ2010』、ポスター、四旬節献金趣意書、献金箱、献金袋を用意いたしました。各小教区には「灰の水曜日」前に届くよう手配しておりますが、追加要求等につきましては下記の各々所属教区宛にお問い合わせください。

尚、『つなぐ2010』には点訳本、録音テープが用意されております。

- | | | |
|--------|---|---|
| 札幌教区 | 〒060-0031
札幌市中央区北一条東6丁目10
札幌教区本部事務局 | Tel: 011-241-2785
Fax: 011-221-3668
e-mail: diooffice@csd.or.jp |
| 仙台教区 | 〒980-0014
仙台市青葉区本町1-2-12
仙台教区本部事務局 | Tel: 022-222-7371
Fax: 022-222-7378
e-mail: kyoku-office@sendai.catholic.jp |
| 新潟教区 | 〒951-8106
新潟市中央区東大畑通一番町656
新潟教区本部事務局 | Tel: 025-222-7457
Fax: 025-222-7467
e-mail: nig-cur@ecatv.home.ne.jp |
| さいたま教区 | 〒330-0061
さいたま市浦和区常盤6-4-12
さいたま教区本部事務局内
カリタスさいたま | Tel: 048-831-3150
Fax: 048-824-3532
e-mail: saitama-kyoku@mbm.nifty.com |
| 東京教区 | 〒112-0014
東京都文京区関口3-16-15
東京教区本部事務局 | Tel: 03-3943-2301
Fax: 03-3944-8511
e-mail: info@tokyo.catholic.jp |
| 横浜教区 | 〒248-0006
鎌倉市小町2-14-4
カトリック雪ノ下教会
横浜教区福祉委員会 | Tel: 0467-22-2064
Fax: 0467-22-4199
e-mail: yokohamafukushi@yahoo.co.jp |
| 名古屋教区 | 〒466-0037
名古屋市昭和区恵方町2-15
名古屋教区社会福祉委員会 | Tel: 052-852-1426
Fax: 052-852-1422
e-mail: caritasnagoya@aju-cil.com |

京都教区	〒604-8006 京都市中京区河原町通三条上ル 京都教区本部事務局 e-mail: cathonbu@mbox.kyoto-inet.or.jp	Tel: 075-211-3025 Fax: 075-211-3041
大阪教区	〒540-0004 大阪市中央区玉造2-24-22 大阪教区本部事務局 e-mail: y.shiki@osaka.catholic.jp	Tel: 06-6941-9700 Fax: 06-6946-1345
広島教区	〒730-0016 広島市中区鞆町4-42 広島カトリック会館 広島教区本部事務局 e-mail: tob7105@mocha.con.ne.jp	Tel: 082-221-6017 Fax: 082-221-6019
高松教区事務所	〒760-0074 高松市桜町1-8-9 高松教区本部事務局	Tel: 087-831-6659 Fax: 087-833-1484
福岡教区	〒810-0028 福岡市中央区浄水通39 福岡教区本部事務局	Tel: 092-522-5139 Fax: 092-523-2152
長崎教区	〒852-8113 長崎市上野町10-34 長崎カトリックセンター e-mail: cnkh211@nagasaki.catholic.jp	Tel: 095-842-4450 Fax: 095-842-4460
大分教区	〒879-0471 宇佐市四日市196-3 宇佐教会 森園神父 e-mail: jb-yasukun@nifty.com	Tel&Fax: 0978-32-3636
鹿児島教区	〒892-0841 鹿児島市照国町13-42 鹿児島教区本部事務局 e-mail: kagoxavi@poem.con.ne.jp	Tel: 099-226-5100 Fax: 099-225-0440
那覇教区	〒902-0067 那覇市安里3-7-2 那覇教区本部事務局 e-mail: chancery78@image.ocn.ne.jp	Tel: 098-863-2020 Fax: 098-863-8474

この冊子の編集にあたり、下記の点に留意しておりますが、お気づきの点を、ご指摘、ご教示いただけましたら幸いです。

- (1) 面談者のプライバシーに差し障る関係者、場所、その他の名称、氏名、住所、固有名詞等については、本人の承諾をいただいた方以外は、すべて仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をしましたが、面談者が話しことばで使われている用語、用法はそのまま使用している場合もあります。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音又は拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

四旬節キャンペーン小冊子 No.24 2010年

「つなぐ 2010」

2010年2月17日 発行 ©カトリック中央協議会2010年

編集 カリタスジャパン
発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411
カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)

印刷 精興社

Printed in Japan

この冊子をお読みになった感想を以下までお寄せください。
今後の編集の参考とさせていただきます。

〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
カトリック中央協議会カリタスジャパン 「つなぐ2010」係
電話 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464
E-mail: info@caritas.jp



カトリック教会 **カリタス ジャパン。**

T 135-8585 東京都江東区湊見 2-10-10 日本カトリック会館
TEL. 03-5632-4439 FAX. 03-5632-4464